



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ラテン語文法書における educare の語釈と用例 : ノニウス・マルケッルス『学説集』とエウテュケス『動詞論』を中心に
Author(s)	白水, 浩信; Shirozu, Hironobu
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 126, 139-154
Issue Date	2016-06-30
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.126.139">https://doi.org/10.14943/b.edu.126.139</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/62512">https://hdl.handle.net/2115/62512</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	070-1882-1669-126.pdf



# ラテン語文法書における educare の語釈と用例

—ノニウス・マルケッルス『学説集』とエウテュケス『動詞論』を中心に—

白水浩信\*

**【要旨】** 近年の研究の進展により、‘education’を「引き出すこと」とする教育学神話から離れて、語の本来の歴史が解明されつつある。‘education’とはラテン語 *educere* (引き出す)ではなく、人間、動物、植物にまで用いられた *educare* (養い育てる)に由来する。本研究は *educare* の用例を古典ラテン語文献に求め、用いられた文脈、語義を明らかにすることを旨とする。

本稿では、ラテン語文法書における *educare* の語釈に焦点を絞って検討する。ノニウス・マルケッルス『学説集』とエウテュケスの『動詞論』を取りあげる。これらは中世においてラテン語文法の教科書として利用され、重要な史料である。両者ともに、*educare* を *nutrire* (栄養を与える)として理解している点は特筆すべきである。また、古代末の文法学者が *educare* を *educere* と区別していた点は強調されてよい。

**【キーワード】** *educare* の用例、ラテン語文法書、ノニウス・マルケッルス、エウテュケス、教育のターミノロジー

## 1. はじめに

### (1) 〈教育 (education)〉のターミノロジー

ここ数年来、変動する新たな社会状況・動向に対応しようとして、教育概念を再定義する動きがみられる。少し古くなったが、2010年に刊行された『教育学研究』では、「「教育」概念の再検討」という特集が生まれ、その冒頭に掲げられた趣旨説明には、「教育を支える諸条件の変化を前に、変化にふりまわされることなくそれに対応するためには、「教育」の概念それ自体にたちもどって検討を行うことも必要<sup>1</sup>」との認識が示され、それ自体としては妥当な課題設定だと賛意を表明する。しかしこの意欲的な特集にあっても、概念の歴史的生成と展開を踏まえた形での検討がほとんどなされていないのは惜まれる。教育概念そのものに立ち返って再考しようとするならば、おのずから言葉の来し方を踏まえた概念史分析がなされてしかるべきであり、そうでなければ様々な意匠の教育概念の行く末ばかりが論じられ、百家争鳴に終始してしまうだろう。いつ、誰が、どのような文脈で用いたのかを抜きに教育概念を定義しなおそうとすれば、言葉の歴史を喪失した空虚な「プラスチック・ワード」<sup>2</sup>の戯れと化す虞すらある。

*education*という言葉そのものを問い直そうとする研究史を繙けば、すでに大田堯や中内敏夫

\* 北海道大学大学院教育学研究院・准教授  
DOI: 10.14943/b.edu.126.139

をはじめとした先駆的かつ課題提起的な研究が存在する<sup>3</sup>。しかし大田や中内の指摘はなお史料の具体性において不十分なところがあり、その不備を埋めるべく、寺崎弘昭はラテン語 *educatio* の用例を実際に検証することで、従前の教育学における教育概念史研究の水準を一気に超えた<sup>4</sup>。彼が解明しえたところを端的に述べるなら、ラテン語 *educatio* の用例のレベルにまで立ち返ると、それは人間はもとより動物や植物をも包含した生きとし生けるものを養い育てる営み、〈養生〉として位置づくものである、ということになる。教育学研究にとってこのことは重要な達成として評価され、継承されるべきである。筆者もまたこれらの指摘に触発されて、用例抽出の不備を補うべく、これまで古典ラテン語における *educatio* の用例を具体的に検討する作業に従事してきた。その結果、次第に判明してきたことは、ラテン語 *educatio* がギリシア語 τροφή (栄養・養育) に対応した〈食〉を核とした〈生〉を養う営みとして理解しようということである<sup>5</sup>。このことは、これまで何の疑いもなくギリシア語 παιδεία を〈教育 (education)〉の西洋的起源と位置づけてきた教育学の通説を覆す論争的な知見の提示として特筆に値するものと考えられる。

とはいえこうした原語<sup>テクスト</sup>に立ち返り、直観や臆説、解釈を極力排したところで成立するターミノロジーの試みは時間も労力もかかる灰色の作業であり、「軽快な優美さ (leichte Eleganz)」を競い合う文壇からは遠く懸け離れたものである<sup>6</sup>。言葉を愛するという文献学 (philology) の流儀に倣い、精確に記述することを旨とするのがターミノロジーである。教育のターミノロジーの企ては言語至上主義者、すなわちモンテーニュの意味での言語偏執狂 (λογοφίλους) として、あるいはまた言葉の起源によって教育の理想を語ろうとする陥穽の典型として批判されるかもしれない<sup>7</sup>。しかしこうした予想される批判に対しては、M・フーコーとともに、「歴史はまた、起源をおごそかに祭り上げるのを笑うことを教えてくれる<sup>8</sup>」と応答しておけば十分であろう。言説の系譜を解明する上で基礎となるターミノロジーは、その言葉をいつ、誰が、どのような文脈で発したのか、またそのことがどのような経路を辿って今日に伝わり、われわれの思考や実践を規定するにいたったのか、そうした言説を扱う者にとってはごく基本的な「由来 (Herkunft)」への問いを探求しようとする好奇心に誘われる。M・フーコーに倣って、それを「自分自身から離脱することを可能にする好奇心<sup>9</sup>」と言い換えても、あながち間違ではないだろう。

それゆえ筆者は、いかなる意味でも「私」なる超越的審級から「教育」を定義し、体系化することとは無縁でありたいと願い、せいぜいのところこれまで意図的、無意図的に忘失されてきた歴史的な文脈のなかに〈教育 (education)〉という言葉の再定位することに関心を寄せてきた。教育言説を構成する語彙や言い回しに関する歴史的知見を積み増し、暫定的かつ蓋然的であるにせよ記述していく試み。時間の経過のなかで教育言説それ自体がそれとは相対的に区別される他の言説との間で干渉しあい、結合と乖離を繰り返しながら展開していく様態を描き出していくこと。これが〈教育 (education)〉という語のターミノロジーの課題である。何世代にもわたって蓄積された膨大な記憶を媒介する、教育言説の自己運動を記述し追跡していくためには、まずはいったんターミノロジーによって、言葉それ自体を標本としてピン留めする作業が必要なのである。

## (2) 本稿の課題と方法

古典ラテン語文獻を正面に据えた教育のターミノロジーはその緒についたばかりと言ってよい。

今後、さらに実証的知見が積み重ねられて、その精度を高めていかなければならないことは言を俟たない。特にラテン語 *educatio* の動詞にあたる *educare* の検討はほとんど手つかずの課題として残されており、名詞 *educatio* と同様、いつ、誰が、どの著作において、いかなる文脈で *educare* という語を用いたのか、このことを探索し整理していく作業が不可欠となる。

この作業は語の形態がよく似た動詞 *educere* の用例と区別していくことと並行して進められなければならない<sup>10</sup>。特に直説法・現在時制・三人称単数という最も用例が多くなる活用形 *educat* の場合、それは *educere* の接続法・現在時制・三人称単数と同形である。だから *educare* を *educere* から区別するには、形態のみでなく、文脈を把握し文意を確定していく作業が必須となる<sup>11</sup>。

言うまでもなくラテン語の動詞は時制（現在・未完了過去・未来・完了・過去完了・未来完了）、態（能動態・受動態）、法（直説法・接続法・不定法・命令法）ごとに人称活用し、さらに分詞類まであわせると、実に多様な活用形態を有し、電子コーパスという文明の利器を用いたとしても、*educare* と *educere* というわずか二つの動詞の用例を網羅し、識別し、整理していくことさえ、相当の手間と困難が伴う。試みに *educare* の活用形ごとにどのような用例が見出されるのか、トイプナー古典叢書 (*Bibliotheca Teubneriana Latina*) の電子版を用いて単純に検索して合計していくと、優に500件を上回る数になる（そのうち約100件が *educat* の用例である）。この検索結果には *educere* と形態上区別できないものが含まれる。とはいえ同様にして得られた *educatio* の用例が69件であることを顧みれば、一目瞭然、圧倒的に多いことが分かる。これまで電子コーパスを活用したラテン語語彙研究を手がけたことのある筆者の経験からすると、これらすべての用例を総点検しただけでも数年がかりとなることは必至であり、本稿はその経過報告という性格をもつものである。

そこで教育のターミノロジー研究の一つの成果として公表される本稿は、トイプナー古典叢書電子版を利用することによって得られた *educare* の用例を逐次紹介し、それに検討を加えるものである。特に古代に著されたラテン語文法書——むしろ語彙集・用例集 (*glossary*) に近い——において、*educare* がどのような用例でもって把握され、どのような語義を有するものとして理解されていたかに焦点をあわせ、分析、考察しようというものである。ラテン文学の黄金期、白銀期もとうに過ぎ去り、俗ラテン語のうちへと言語の記憶が失われていく4～6世紀、古典ラテン語を記録し、継承しようとする一種の復興運動があったのだろう。その最も有名なものがドナトゥス (*Aelius Donatus*, 4世紀中頃) の『文法術 (*Ars grammatica*)』であり、中世を通してラテン語文法の教科書として重宝された。だが残念ながら、ドナトゥスの『文法術』には *educare* の用例は確認できない。ただしこのドナトゥス『文法術』と同じ古代末に著された文法書のなかには、*educare* にまとまった説明を割いているものも存在する。それがまず次節で取りあげるノニウス・マルケッルス『学説集』であり、さらに第3節で取りあげるのがエウテュケス『動詞論』である。これらは中世に伝わり、*educare* の用法・語義を近代へと橋渡しすることになる重要な文献である。本稿では、古代末、*educare* がいかなる語義を有するものとして総括され、その際、どのような用例に依拠していたのか、明らかにすることにしよう。

## 2. ノニウス・マルケッルス『学説集』

### (1) 産婆は引き出し、乳母は養う——ウァローの詩句をめぐって

イヴァン・イリイチ『シャドウ・ワーク』には、次のような一節がある。ラテン語 *educare* の原義を確かめようとする本稿の関心にとっても看過できない内容を含むので、多少長くはなるが、引用しておこう。

子孫の教育 (*educatio proles*) とは、ラテン語の文法では女性主語を要求する語である。それは雌犬や雌豚であろうと、人間の女であろうと、食物を与え育てる (*feeding and nurturing*) という母親の仕事の意味する。人間のあいだでは女たちだけが教育する (*educate*)。そして彼女たちが教育する (*educate*) のは幼児 (*infants*) だけである。幼児とは、語源的には、まだ話すことができない者のことである。教育する (*educate*) ことは、教育学上の言い伝え (*pedagogical folklore*) が主張する「引き出すこと (*drawing out*)」とは語源的になにも関係がない。ペスタロッチはつぎのようなキケロの言葉に注意すべきだったのだ。*educit obsterix — educat nutrix* すなわち、産婆が引き出し、乳母が育てる。ラテン語では、男はそのどちらもしないのであって、彼らは教えること (*docentia*) と導くこと (*instructio*) に従事する。<sup>12</sup>

まずはこのイリイチの指摘にこだわってみたい。西洋における *education* という言葉の来し方を解明すべく、ラテン語 *educare* の用例に即してその系譜をたどり直してみようという本研究の緒にあって、極めて示唆に富むと同時に、いくらか修正も必要だろうと感じられるからである。

イリイチの言うように、ラテン語 *educatio* とは、「食物を与え育てる」ことを意味し、女たちだけの営みであったのだろうか。ラテン語文献ではどのような用例によって裏づけられるのか検証しておく必要があるだろう。そのうえで *educate* は本当に「引き出すこと」とは関係がなく、「教育学上の言い伝え」として退けられるべきであると結論づけてよいのかどうか、再審に付さねばなるまい。

まずここでイリイチは不用意な誤りを犯しているのであって、訂正を含めて指摘しておく必要がある。「キケロの言葉」として参照されている、*educit obsterix — educat nutrix* という一節はキケロのものではなく、ウァローの言葉とされるものであり、ジャン＝ジャック・ルソーが『エミール』のなかで次のように引用していることでよく知られている。

われわれの最初の導き手は乳母 (*nourrice*) である。この *éducation* という言葉が、古代人にとっては、われわれがもはやその意味では使わなくなった別の意味をもっていた通りである。それは養うこと (*nourriture*) を意味していた。ウァローは言っている。「産婆は引き出し、乳母は養い、子守りはしつけ、教師は教える (*educit obsterix, educat nutrix, instituit paedagogus, docet magister*)」と。このように、*éducation* (養うこと)、*institution* (しつけること)、*instruction* (教えること) の三つは、養育者 (*gouvernante*)、導き手 (*précepteur*)、教師 (*maitre*) がちがうように、それぞれちがう目的をもっていた。しかしこれらの区別はよいとはいえない。よく導かれる (*conduit*) には子どもはただ一人の指導者 (*guide*) に随うべきである。<sup>13</sup>

こうして ‘educit obsterix, educat nutrix’ という人口に膾炙した一節は、ウォローからの引用であったことが判明したかに見える。ところがルソーの述べているところを鵜呑みにするのではなく、実際に自分の目でこのラテン語の引用箇所を確かめようとすると、すぐにそう単純な話ではないことが分かってくる。まず『エミール』の該当箇所に振られた編者による注を参照しておく、引用された文献はノニウス・マルケッルス (Nonius Marcellus, 4世紀頃) によるものだということが記載されている<sup>14</sup>。

ノニウス・マルケッルスとはいかなる人物であろうか。教育史研究において、ほとんど言及されたことのないこの人物と著作について紹介しておく必要があるだろう。とはいえノニウス・マルケッルスについて、4世紀頃のヌミディアのテュブルシクム (Tubursicum Numidarum: 現在のアルジェリア) 生まれという以外のことは、分かっていることは多くない<sup>15</sup>。独学でラテン語文法を修め、主著『若者のための学説集 (De compendiosa doctrina ad filium)』(全20巻)を著し、そのみが不完全な形で今日に伝わっている。その第1巻から第11巻にかけて、様々な語彙とその用法、語源などが古典の引用例を通じて説明されており、その一つとして educare に関して次のような説明がなされているわけである。

EDVCERE et EDVCARE hanc habent distantiam. educere est extrahere; educare nutrire et provehere. Varro Cato vel de liberis educandis (5): educit enim obstetrix, educat nutrix, instituit paedagogus, docet magister.<sup>16</sup>

(訳)

EDUCEREとEDUCAREには次のような違いがある。educereは外に引き出すことであり、educareは食物を与え養うこと、前へ連れて行くことである。ウォローは「カトー、あるいは子どもの養育について」(5巻)のなかで、「つまり産婆は引き出し、乳母は養い、子守りはしつけ、教師は教える」と述べている。

ここでノニウス・マルケッルスは、語形からして混同されがちな educare と educere には明白な違いがあって、educareはnutrire、すなわち母乳をはじめとした栄養を与えることによって子どもを養い育てるという意味で用いられ、その子を前へ導き、成長させるという意味でも使用されるというのである。それゆえウォローの詩句に帰される ‘educat nutrix’ は ‘nutrit nutrix’ と同語反復的に言い換えうるのであり、educareは子どもを食べさせることによって生命を養い育てる、すなわち哺育であり、養生の営みであるとまずは了解することができるのである。

ではノニウス・マルケッルスが用例として引いたこの一節を含むウォローの著作とはいかなるものであろうか。ウォローこと、マルクス・テレンティウス・ウォロー (Marcus Terentius Varro, BC116-27) は共和政ローマの政治家であり、キケロとともにカエサルと干戈を交えるも敗れ、アウグストゥス治下になって文人として手厚く庇護を受けた後は、ローマ人の理想である研究と著述三昧の閑暇の日々を送った人物である。著作の数は74作品640巻にもものぼると推定されている。しかしウォローの代表作とされる『年代記 (Antiquitates rerum humanarum et divinarum)』(全41巻)をはじめ、その大半は散佚してしまい、現存するのは『ラテン語論 (De lingua latina)』(全25巻のうち5~10巻)と『農業論 (Rerum rusticarum)』(全3巻)及び膨大な著作の断片のみである<sup>17</sup>。もちろんくだんの ‘educit obsterix, educat nutrix’ の出典もまた、残念ながら失われてしまっている。この著作はキケ

ロの『大カトー、あるいは老年について』を彷彿とさせる人生の様々な局面を扱った随筆とされ、『人物評伝 (Logistricon)』(全76巻, BC44頃)に収録されている。しかしその大半が散佚し、わずかの断片を知ることができるのみである。そのうちの一つが「カトー、あるいは子どもの養育について (Cato vel de liberis educandis)」(『人物評伝』第5巻)と呼ばれているものであり、‘educit obsterix, educat nutrix’の出典としてノニウス・マルケッルスがeducareの用例を採取し、その題名と若干の断片のみが後世に伝わっているものである。

『人物評伝』, 就中「カトー、あるいは子どもの養育について」には何が書かれてあったのだろうか。カトー (Marcus Porcius Cato, BC234-149) には、『息子への書 (Libri ad filium)』という百科全書の著作があったことが知られているから<sup>18</sup>, あるいはウァローはカトーのこの書に随って筆を執ったのかも知れない。カトーのこの著作もまた失われており、こうしたことも推測の域を出るものではないが、プルタルコス (Plutarch, 46頃-127頃) の『英雄伝』にある大カトーの熱心な子育てぶりに関する記述を想起することはできよう<sup>19</sup>。カトーは妻の育児につき添い、子どもに物心がつくと、奴隷に子どもをまかせるのを嫌い、自ら読み書きや歴史、馬術や泳法を教えたとされる。『息子への書』もまたこうした背景のなかで著されたものであろう。H・I・マルー『古代教育文化史』によれば、カトーは自らの子どもを「完全な美徳の鑄型に合わせて作り上げ、傑作にしよう」という熱意をもってたとされる<sup>20</sup>。

ここでわれわれはウァローの「カトー、あるいは子どもの養育について」、すなわち ‘Cato vel de liberis educandis’ という標題に、今一度、立ち返ってみたくなる。カトーが子育てに熱心であったことはよく知られているし、プルタルコスの証言とも符牒が合う。カトーは息子を育てるにあたって、自ら槍を投げ、剣をとり、拳闘の相手をつとめ、暑さ寒さの耐え方まで教えた。「自分の手で、大きな字で、歴史を書き」、先祖の事績を知るよすがとしたと伝わっている<sup>21</sup>。確かにカトーは父祖の慣習 (mos maiorum) を手ずから伝える古代ローマ人が理想とするよき家父を地で行く者であったのだろう。しかし関心を惹くのはそのことではない。むしろウァローがこうしたカトーのよき父親ぶりを erudire や instituere を用いるのではなく、‘liberi educandi’ というように educare の動形容詞 (gerundium) を用いて評することができたことが興味を引くのであり、educare が単に子どもに栄養を与えるということのみでは理解しきれない広がりをもっていた点が注目に値すると言いたいのである。すでに述べたようにイリイチは、‘educatio prolis’ という語は「女性主語を要求する語」であると説明していたのだが、カトーはどこまでいっても男であり、ローマ人の理想とする家父である。どうやらイリイチの説明は、短兵急に「教育学上の言い伝え」を解体しようとするあまりの勇み足だったようである。

## (2) 男の Educare —— 〈食〉をめぐる喜劇と悲劇

educare の用法についての解説として、ノニウス・マルケッルス『学説集』からもう一例を見出すことができる。educare が単に食べさせることだけでは理解しきれないことを示す、重要な語釈を含む記述である。

ALERE et EDVCARE hoc distant: alere est victu temporali sustentare, educare autem ad satietatem perpetuam educere. Plautus in Menaechmis (98):

nam illic homo hominis[sic] non alit, verum educat.

Accius Andromeda (114): alui, educavi: id facite gratum ut sit seni.<sup>22</sup>

(訳)

ALEREとEDUCAREは次のように異なる。alereは食糧によって一時的に食わせることであり、それに対しeducareは常に満足するところまで連れていくことである。プラウトゥスの『メナエクス兄弟』(98行目)には次のようにある。「なぜならあの人は人々を食わせるのではなく、本当に養ってくれるのだから」。アッキウスの『アンドロメダ』(114行目)にはこうある。「私が食わせ、養ったのだぞ。お前たちは老いた者に対して感謝しろ」。

ここでノニウス・マルケッルスはeducareの用法をalereとの比較から論じている。alereという語は、『オックスフォード・ラテン語辞典』によれば、乳を飲ませる(suckle)、餌をやる(feed)という意味から、生活物資を供給する(supply with a livelihood)、ひいては子どもを養育する(rear, bring up)という意味に到り、確かにeducareと類似した語義で用いられるようである<sup>23</sup>。英語ではaliment, alimentationの語源と見做されている<sup>24</sup>。ラテン語でaltorといえば里親、扶養者のことであり、altrixという乳母、子守り女の事を指す。ラテン語文献の日本語訳を読んでいると、時折、「養う」という翻訳に出会うことがあり、原語はeducareではなかろうかと期待して原文の該当箇所にあたってみると、ままこのalereであることが多い。実際、『オックスフォード・ラテン語辞典』を繰ってみても、alereの用例はeducareのそれに比して究めて充実しているのが分かる。

さて、まずは最初の用例である『メナエクス兄弟』の著者について説明しておこう。いや、本来ならば補足することさえ不要と思われるほど、ティトゥス・マッキウス・プラウトゥス(Titus Maccius Plautus, BC254頃-184)は古代ローマを代表する傑出した喜劇作家として有名である。また、シェイクスピアやモリエールをはじめとした近代初期の劇作家たちに与えた影響は極めて大きい。それこそ上述のウァローは「もし文芸の女神ムーサたち(ムーサイ)がラテン語を話すことを望んだなら、プラウトゥスの言葉を話したであろう<sup>25</sup>」と高く評価している。今日、21編の喜劇が伝わっており、ユピテルの変装による取り違いの喜劇『アンピトルオ(Amphitruo)』、守銭奴の喜劇『黄金の壺(Aulularia)』、『ほら吹き兵士(Miles Gloriosus)』などがよく知られている。『メナエクス兄弟』もまた取り違いの喜劇としてつとに知られ、生き別れの双子が互いにそれと知らずに入れ替わり、妻や友人らとの間で騒動を巻き起こすという滑稽譚である。シェイクスピア『間違いの喜劇(The Comedy of Errors)』(1594)はこの作品に拠っている<sup>26</sup>。

それでは『メナエクス兄弟』のeducareの用例について考察してみよう。それにしてもalereは一時的に食わせることで、educareは継続的に満腹させることだというのは面白い比較である。そもそもノニウス・マルケッルスが参照した箇所の直前、喜劇『メナエクス兄弟』の第一幕が開いたばかりのシーンでは、食客ペニクルスの次のような独白がみられる。

逃げ出さないようにちゃんと見張っておきたいなら、  
そいつを食べ物や飲み物で縛っておくのがいい。  
奴の鼻先をご馳走の積まれたテーブルにくっつけておけ。  
食べる物、飲む物を、奴の望むままに  
毎日飽きるほど与えてやれば、  
たとえ死に値する罪を犯したとしても、必ずや逃げることはない。

そういう縛りで縛っておくかぎりは、たやすく見張っていられるだろう。  
 食べ物の縛りはそれぐらい粘りついて放さないものなんだ。<sup>27</sup>

食欲の命じるままに、ペニクルスはメナエクムスの虜となり、文字通り自分から縛られに行く——つまり、ご馳走してもらうために意気揚々とメナエクムスの家を目指す。その時の台詞が、‘nam illic homo homines non alit, verum educat, recreatque.’ すなわち「メナエクムスは人を食わせてくれるだけでなく、正真正銘、養ってくれるうえに、生き返らせてもくれるんだ」というわけである。alereがその場限りで食べさせる行為なのに対し、educareは持続的、継続的に糧を与え養う、〈生〉を再生する（recreate）行為であるということになる。この用例をもとにノニウス・マルケッルスはeducareとは食事を与えるだけでなく、継続的に扶養し満足を引き出す営みだと述べていたわけである<sup>28</sup>。ちなみに入れ替わった双子のメナエクムスはもう一人のメナエクムスのために準備された食事を勘違いして、ペニクルスのことなどお構いなしに腹ごしらえしてしまい、食い意地の張った食客は食事にあぶれてしまうことになる。educareどころかalereの恩恵も逃した恨みをこめてペニクルスは、「羽より軽い人（homo levior quam pluma）、極悪人の人でなし、人間の恥、ペテン師の碌でなし」とあらん限りの罵声をメナエクムスに浴びせかけることになる<sup>29</sup>。いずれにせよ、ここでもeducareの行為主体（主語）は男であるメナエクムスであり、しかも子どもでも何でも無い、貪欲な食客ペニクルスを養うという文脈で用いられているわけである。

ノニウス・マルケッルスが次に引く用例は、ルキウス・アッキウス（Lucius Accius, BC170-86頃）の『アンドロメダ』からのものとされる。アッキウスはイタリア、ウンブリア地方ピサウルムで生まれ、解放奴隷の子であり、劇作家、文人として名を馳せた。執政官をも務めたデキムス・ブルトゥス（Decimus Junius Brutus, カエサル暗殺で有名なブルトゥスの祖父）の庇護を受け、40編以上の悲劇を残したとされ、その多くはトロイア戦争に関する伝承に題材を求め、翻案したものとされる<sup>30</sup>。

悲劇『アンドロメダ』もまた断片で伝わるのみであり、ノニウス・マルケッルス『学説集』に収録されている断片はその再現にあたって重要な史料となる。今日、伝わっている部分から梗概を記せば、エチオピア王ケーベウスとカッシオペイアの娘アンドロメダは、その母が美貌において海神ネーレウスの娘たちに勝ると自惚れたために、ネプチューンの怒りを買って怪物の餌食として荒波迫る岸壁に鎖でつながれることになる。そこへメドゥーサを倒したペルセウスが通りかかり、彼女を救出することを条件に妻娶るという話である<sup>31</sup>。引用されている箇所は、ペルセウスが首尾よくアンドロメダを救い出し、元の婚約者との間で一悶着あった挙げ句、いよいよ結ばれるという段になって、父王ケーベウスが娘と別れることを渋るというシーンである。もう一度、文脈を補いながら訳し直しておこう。

alui, educavi: id facite gratum ut sit seni.<sup>32</sup>

（訳）

私（ケーベウス）がこれまでアンドロメダを食わせ、養ってきたのだぞ。（ペルセウスとアンドロメダよ）お前たちは、この老いた私たちに対してしかと恩返ししてくれ。

台詞の冒頭、ケーベウスが一人称単数、つまり「私」を主語に語り出すalereとeducareの

直説法・能動態・完了時制の形が実に恩着せがましい。現代なら、誰のおかげで大きくなったと思っているのだ、といったところだろう。年老いた両親の恩に報いるべく、その行きずりの男と別れて、ここに残ってくれと言いたいのだろう。何にせよここでも、男である父親が educare の主語になっている。alere と educare が同語反復的に畳みかけるように用いることによって、出ていく愛娘を説得する父親の哀切を表現し得ている。食べさせてきたこと、そのことによって〈生〉を養ってきたことを、娘として忘恩の行為で踏みじめるのかと問い詰めているのである。その後にくるとされるペルセウスの台詞は、「あなたは私たちを離ればなれにして、死なせたいのだろうか (nosque ut seorsum dividos leto offeres)<sup>33</sup>」というものであり、断片しか残っていないので定かではないが、ギリシア神話の伝承どおり、ペルセウスはアンドロメダを連れて帰還することになるのだろう。奇しくも、プラウトゥス『メナエクス』の用例もアッキウス『アンドロメダ』の用例も、男の educare を契機として期待から失望へ、恩義から忘恩へと舞台を一転させる効果をねらって用いられているのである。

### 3. エウテュケス『動詞論』

次にエウテュケス『動詞論 (Ars de verbo)』について見ていくことにしよう。エウテュケス (Euthyches, 6世紀頃) について知られていることはごくわずかである。6世紀頃に活躍した文法学者であり、『文法学教程 (Institutiones grammaticae)』で有名なカエサレアのプリスキアヌス (Priscianus Caesariensis, 5世紀頃) の弟子であるということが分かっているくらいである。ここで取りあげる『動詞論』は二巻からなり、動詞の活用について説明しており、中世にはよく知られていた書物だったという<sup>34</sup>。

まずエウテュケスは educere と educare の違いについて、次のように説明している。

duco quoque u longa antecedente tam in simplici quam in omnibus compositionibus tertiae coniugationis est, ut abduco abducis, adduco adducis, subduco subducis, induco inducis, educo educis, id est extraho. in una tantum compositione educo u brevi profertur differentiae causa, significans nutrio, et tum solum primae est coniugationis, ut apud Virgilium in libro X  
quattuor hic iuvenes, totidem quos educat Vfens.<sup>35</sup>

(訳)

単独でも合成された場合でも、長母音の u が先行する dūcō は第三変化動詞である。abduco-abducis (abducere: 連れ去る), adduco-adducis (adducere: 連れて行く), subduco-subducis (subducere: 下から引き出す), induco-inducis (inducere: 上に導く), そして educo-educis (educere) は外に運ぶという意味である。それとは別に短母音の u によって示される唯一の語 ēducō (educare) は養う (nutrio) という意味であり、それだけが第一変化動詞である。ウェルギリウスの『アエネーイス』第X巻には次のようにある。

これら四人の若者、またウーフェンスが育てた同数の若者らを

ēducēre と ēducāre の違いを長母音と短母音の違いから説明している点が特徴的である。そし

てノニウス・マルケッルスの話釈と同様に、educareはnutrire（栄養を与える、養う）で置き可能であると捉えている。その最たる用例が、ラテン文学の最高峰とされるウェルギリウス（Publius Vergilius Maro, BC70-19）の『アエネーイス（Aeneis）』であることは特筆されてしかるべきであろう。つまりeducareの用例の一つの典型が、ルネサンス期の文芸復興にも多大なる影響を与えた『アエネーイス』に求められているのである。労を厭わず、『アエネーイス』の第X巻518行を含む数行を確認しておこう。

Sulmone creatos

quattuor hic iuvenes, totidem quos educat Ufens,  
viventis rapit, inferias quos immolet umbris  
captiveque rogi perfundat sanguine flammis.<sup>36</sup>

（訳）

まず、スルモの子なる

四人、またウーフェンスが育てた同数の若者らを

生け捕りにする。この子どもをパラスの霊に捧げる犠牲として屠り、

葬儀の薪を燃やす炎にこれら捕虜の血を振り撒くためであった

『アエネーイス』第VII巻からはじまる後半部分は、ラウレンテスの王ラティーンヌスの娘ラウィーニアをめぐる、ルトゥリー人の王トゥルヌスとトロイア人を率いるアエネーアスとのローマ建国を賭けた戦争叙事詩である。ここでウーフェンス（Vfens）とは「名声と武運にすぐれる（insignem fama et felicibus armis）」（VII-745）と称されるラティウムの人であり、トゥルヌス側の指揮官（dutores primi）の一人である（VIII-6）。トロイア勢の猛攻の前にギュアス（Gyas）によって斬り倒され最後を遂げることになる（XII-460）。educareが用いられた該当箇所の直前では、アエネーアスが可愛がってきたパラスがトゥルヌスとの一騎打ちに敗れ、投げ槍の一撃で戦死するという叙述が先行する。パラスは胸を貫く槍を引き抜こうとするがむなしく、ウェルギリウスは「同じ道（傷口）を辿って血と命が流れ出る（una eademque uia sanguis animusque sequuntur）」（X-487）という見事な表現を与え、『アエネーイス』後半の転換点を飾っている。そしてアエネーアスが仲間の死に報いるべく、ウーフェンスが手塩にかけて養い育ててきた兵の若者たちを捕虜とし、生贄として血祭りに捧げようというまさにその場面で、educareは用いられていることになる。やはりここでも男であるウーフェンスが若者を戦士として立派に育てあげたという文脈でeducareが使用され、大事に養い育てられればそれだけ、却ってその生命を奪うことが格好の報復となり、踏みにじられた仲間たちの霊への手厚い弔いにもなるというわけである。どうやら『アエネーイス』における男のeducareは、生命を養い育む行為であると同時に、それを奪い去られることがこの上もない哀しみであるという表現上の効果をもつものようである。

#### 4. 小括—educare, あるいは養生の恩義

これまでわれわれは、古代末に著された二つのラテン語文法書、ノニウス・マルケッルス『学説集』とエウテュケスの『動詞論』を手がかりに、educare の用例と語義を検討してきた。結びとして、本稿を通して明らかになったことを三点にまとめて振り返っておくことにしよう。

まず第一に確認されてよいことは、古代末の4世紀から6世紀にかけて、古典ラテン語を分析し直し、文法書として記録し、継承しようという一連の著作のなかに、educare についての説明が明示的に含まれていたという点であろう。おそらくは中世の学徒のラテン語学習の便宜をもはかったこれらの文法書が、educare の語釈の上で果たした役割は少なくない。その際、いずれの文法書も educare と educere を比較対照することで両者の違いを説明している点も強調されて然るべきである。古代末の時点で、少なくとも文法学者たちは educare と educere の語義と用法を区別していたのである。19世紀後半に刊行された Lewis & Short の *A Latin Dictionary* には educare と educere は厳密に区別されるわけではないと注記されているが<sup>37</sup>、そうではなかったのである。むしろ古代末のノニウス・マルケッルスやエウテュケスにとって、educare は「(栄養を与え) 養う」ことであり、それに対し educere は「外に連れ出す」ことであり、基本的にはそれぞれ区別されるべき別々の動詞であると認識されていたわけである。

第二に確認すべきことは、educare の用例についてである。ノニウス・マルケッルス『学説集』は、educare の典型的な用例としてウェローの「カトー、あるいは子どもの養育について」を挙げていた。人口に膾炙した 'educit obsterix, educat nutrix' の典拠は、今は散佚したウェローの大カトーに関する評伝であったわけである。さらにノニウス・マルケッルスは alere と educare の違いについて論じており、alere が一時的に食を与えることであり、educare は継続的に満足させるべく養うことであると述べていた。この違いを例証するにあたり、プラウトゥスの喜劇『メナエクス兄弟』とアッキウスの悲劇『アンドロメダ』の一節を引いていた。そのいずれもが、実は男の educare を証言する用例であった点も興味深い。

またエウテュケスの『動詞論』では、ラテン文学の最高傑作とされるウェルギリウスの『アエネーイス』が引用されていたことは特筆に値する。これまで教育史研究の立場から、この事実に言及しているものを筆者は寡聞にして知らない。『アエネーイス』に educare の用例が存在したことは、ルネサンス期の古典の再発見を契機とする、ラテン語 *educatio* への関心の高まりとも関係がある可能性を示唆するものである。もちろんそのことは、あらためて近代初期における各国語への *educatio* の受容史の解明をまって、検討する必要がある。

最後に、ノニウス・マルケッルスが述べていたように、educare が一時的なものではなく、継続的に〈生〉を養うという語義を有するものであってみれば、それは生きるにあたって恩義関係（親—子関係、主人—食客関係、師—弟子関係）を結ぶものとなってくる。実際、『メナエクス兄弟』の食客は、educare の放つ魅力に引き寄せられ、わざわざ自ら縛られるために主を訪ね、食いっぱぐれた腹いせに罵声を浴びせかけることになる。『アンドロメダ』では、父王ケーペウスが育ててもらった恩義を返せとばかりに愛娘を説得し、その甲斐もむなしくペルセウスに連れ去られるわけである。そして何より、『アエネーイス』のウーフュンスの育てた若者たちは、パラスの死への報復のために惨殺され、灰燼に帰せられる。educare が〈生〉を養う営みであってみれば、当然、educare に対する恩義が裏切られたときの絶望や憎悪も大きいのである。

そのことを知りぬいていたのであろうか。セネカ (Lucius Annaeus Seneca, BC 1頃 –AD 65) は『マルキアに寄せる慰めの書 (*Ad Marciam de consolatione*)』(6.12) のなかで次のように述べている。

Provenerunt enim satis magni fructus laborum tuorum ex ipsa educatione, nisi forte ii, qui catulos avesque et frivola animorum oblectamenta summa diligentia nutriunt, fruuntur aliqua voluptate ex visu tactuque et blanda adulatione mutorum, liberos nutrientibus non fructus educationis ipsa educatio est. Licet itaque nil tibi industria eius contulerit, nihil diligentia custodierit, nihil prudentia suaserit, ipsum quod habuisti, quod amasti, fructus est.<sup>38</sup>

(訳)

あなたは子育てそのものからあなたの労苦に対する十分に大きな報酬を得ているのですから。もっとも、獣の子や鳥やくだらない愛玩動物を精魂込めて飼育する者は、眺めたり触れたりすることで、あるいは、物言わぬ動物の甘えるようなじゃれつきから何らかの快樂を得るのに対して、人間の子供を養育する親にとって養育それ自体は養育の報酬でないというのなら、話は別です。たとえその子が勤勉さであなたに何の利益ももたらしてくれず、慎重細心さであなたを守ってくれず、賢明さであなたに助言してくれなかったとしても、その子を授かったこと、その子を愛したこと、それ自体が報酬なのです。

educatioの労苦それ自体がeducatioの喜び(fructus)であり、すでに報われている。ただし息子に先立たれた母親を慰める一節だと知れば、なおいっそう哀惜の念を禁じえない。

## 註

- 1 「「教育」概念の再検討」『教育学研究』日本教育学会, 第77巻第4号, 2010年, 1頁
- 2 ベルクゼン, U. 『プラスチック・ワード—歴史を喪失したことばの蔓延』糟谷啓介訳, 藤原書店, 2007年, 110頁
- 3 大田堯『教育の探求』東京大学出版会, 1973年, 28-29頁。中内敏夫『新しい教育史—制度史から社会史への試み』新評論, 1987年, 21-22頁
- 4 寺崎弘昭『ヨーロッパ教育関連語彙の系譜に関する基礎的研究』平成13-15年度科研費研究成果報告書, 2004年
- 5 白水浩信「教育・福祉・統治性—能力言説から養生へ」『教育学研究』日本教育学会, 第78巻第2号, 2011年, 50-60頁
- 6 Nietzsche, F., 'Die Geburt der Tragödie', *Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke*, herausgegeben von G. Colli und M. Montinari, Verlag de Gruyter, 1980, S.130 (邦訳, 『悲劇の誕生』(ニーチェ全集2) 塩屋竹男訳, ちくま学芸文庫, 1993年, 167頁)
- 7 Montaigne, M., *Essais*, traslation en français moderne, notes, questionnaires et synthèses par Bruno Roger-Vasselín, agrégé de Lettres classiques, docteur ès lettres, Hachette, 2015, p.148 (邦訳, 「子供たちの教育について」宮下志朗訳, 『エッセー 1』白水社, 2005年, 300頁)。ちなみにモンテーニュはこの 'De l'institution des enfants' (1580) において、一度も 'éducation' という語を用いていない。

- 8 Foucault, M., 'Nietzsche, la généalogie, l'histoire', *Dits et écrit I: 1954-1975*, édition établie sous la direction de Daniel Defert et François Ewald avec la collaboration de Jacques Lagrange, Gallimard 2001, p.1007 (邦訳, 「ニーチェ・系譜学・歴史」伊藤晃訳, 『バイデシア』季刊11号, 竹内書店, 1972年春, 64頁). 「系譜学は灰色のものである。細かなことを問題とし, 忍耐強く資料にあたる。ぼやけ, すり消え, 何度も書き直された羊皮紙に基いて作業が進められる」(Ibid., p.1004 (邦訳, 62頁))
- 9 Foucault, M., *L'usage des plaisirs: Histoire de la sexualité II*, Gallimard, 1984, pp.15-16 (邦訳, 『快楽の活用一性の歴史Ⅱ』田村俣訳, 新潮社, 1986年, 15-16頁)
- 10 池亀直子・高梨誠「'educate' の語源解釈におけるイギリス・ロマン主義の思想的影響—S. T. コールリッジによる「教育」の定義とOED」『秋田公立美術大学研究紀要』第2号, 2015年, 23-37頁。ここで高梨らは「educereが「～を養育する」という語義で用いられているのは, 韻律の制約上educareが使用できない場合に限られる」(26頁)と指摘する。ただし例証がわずか, 具体的な脚韻分析も提示されておらず, 一般論としての理解にとどまる。今後の具体的な用例の韻律分析に期待したい。イアンボスやヘクサメトロスについても誤解があるように思われる。韻文におけるeducereの代用例として, プラウトゥス『クルクリオ』第4幕第2場(518行)が唯一あげられているが釈然としない。bene ego istam eduxi meae domi et pudicē. (Plautus, 'Curculio', *Plautus*, Vol. 2, English translation by P. Nixon, Loeb Classical Library, 1917, p.244) (訳: おれが自分の家で, ちゃんと清い身で育てたんだ。)
- 11 しかも educereについてもまた, 「教育 (education)」の原義を「能力を引き出すこと」とする近代教育学の神話が結晶化する核として作用した言葉であるから, それ自体の検討も必要だろう。さしあたり educere が「能力」すなわちラテン語でいうところの potentia や facultas を対格として取り, 生得的・潜在的能力を「引き出す」行為として語られていたのかについて確かめる課題があげられるだろう。ただし本稿では, 紙幅の都合から educare の用法について限定して論じ, educere については稿をあらためて扱うことにする。
- 12 Illich, I., *Shadow Work*, Marion Boyars, 1981, p.46 (邦訳, 『シャドウ・ワークー生活のあり方を問う』玉野井芳郎・栗原彬訳, 岩波現代文庫, 2006, 113頁)
- 13 Rousseau, J.-J., 'Émile ou de l'éducation', *Écrits pédagogiques I: Œuvres complètes*, vol. VII, sous la direction de R. Trousson et F. S. Eigeldinger, Édition Slatkine, 2012, p.318 (邦訳, 『エミール (上)』今野一雄訳, 岩波文庫, 1962年, 32頁。なお訳文は適宜あらためてある)
- 14 Ibid., p.318 (邦訳, 398頁)
- 15 Schmidt, P. L., 'Nonius Marcellus', *Der neue Pauly: Enzyklopädie der Antike*, Band 8, herausgegeben von Hubert Cancik und Helmuth Schneider, Verlag J. B. Metzler, 2000, SS.994ff.
- 16 Nonius Marcellus, *De compendiosa doctrina*, Vol. III, editit W. M. Lindsay, Saur Verlag, 2003, p.718 (447-448M.)
- 17 Sallmann, K., 'Varro Terentius, M.', *Der neue Pauly: Enzyklopädie der Antike*, Band 12, herausgegeben von Hubert Cancik und Helmuth Schneider, Verlag J. B. Metzler, 2002, SS.1130ff.
- 18 Kierdorf, W., 'Porcius Cato M.', *Der neue Pauly: Enzyklopädie der Antike*, Band 2, herausgegeben von Hubert Cancik und Helmuth Schneider, Verlag J. B. Metzler, 1997, SS.1033ff.
- 19 Plutarch, *Plutarch's Lives: Themistocles and Camillus Aristides and Cato Major Cimon and Lucullus*, English translation by Bernardotte Perrin, Loeb Classical Library, 1914, pp.358-365 (邦訳, 『アリストステイデスとマルクス・カトー (大カトー)』柳沼重剛訳, 『英雄伝 3』, 京都大学出版会, 2011年, 84-86頁)
- 20 Marrou, H. I., *Histoire de l'éducation dans l'antiquité*, Seuil, 1948, p.318 (邦訳, 『古代教育文化史』横尾壮英・飯尾都人・岩村清太訳, 岩波書店, 1985年, 283頁)

ここでフランス語訳, 'formant et composant' (鋳型に合わせて作り上げる) に対応するプルタルコス『英雄伝』の該当箇所では, 子どもを 'πλάσσειν' (捏ねて形作る), 'δημιουργεῖν' (制作する) という動詞が用いられている。πλάσσειν というのは陶工が粘土を捏ねて形作ることを原意とし, πλάσμα といえば塑像のことであり, πλαστικός という形容詞を経て, 1598年にイタリア語 plastica の翻訳語として plastic という英語語彙としてはじめて用いられる。子どもの可塑性 (plasticity) というのは何も近代教育学の独擅場ではない。古代においてさえ, 子育ては陶工や職人の手仕事の<sup>メタファー</sup>隠喩を通して類比されていたのである。δημιουργεῖν と同様であり, δημιουργός といえば職人, 工匠のことであり, プラトン『ティマイオス』で造物主として設えられたことはあまりにも有名である。古代から連綿と教育に関する思惟は, 子どもを素材 (materia) としてそれに形相 (forma) を与える職人・工作者の隠喩によって規定されてきた。

宮澤康人は, コメニウスが学校を「人間の製作場」と呼んだことにふれ, 近代の教育観の背景にホモ・フェーベル的自然観が潜んでいることを指摘する (宮澤康人『教育関係』の歴史人類学—タテ・ヨコ・ナナメの世代間文化の変容』学文社, 2011年, 168頁)。

21 Plutarch, *op.cit.*, pp.362-363 (邦訳, 85頁)

22 Nonius Marcellus, *op.cit.*, p.682 (422M.). なお, ブラウトゥスからの引用中, hominis という箇所は homines の誤りであろう。Cf. Plautus, 'The Two Menaechmuses', *op.cit.*, pp.434-435 (邦訳, 「メナエクス兄弟」『ローマ喜劇集 2』岩崎務訳, 京都大学出版会, 2001年, 346頁); Accius, 'Andromeda', *Remains of Old Latin, Volume II: Livius Andronicus. Naevius. Pacuvius. Accius*, English translation by E. H. Warmington, Loeb Classical Library, 1936, pp.352-353

23 *Oxford Latin Dictionary*, edited by P. G. W. Glare, Vol. 1, Oxford U.P., 2012, pp.116-117

24 寺澤芳雄編『英語語源辞典』(縮刷版), 研究社, 1999年, 31頁

25 Quintilian, *The Orator's Education*, Books 9-10, English translation by D. A. Russell, Loeb Classical Library, 2001, pp.306-307 (Liv.10.1.99)

26 Lefèvre, E. F., 'Plautus', *Der neue Pauly: Enzyklopädie der Antike*, Band 9, herausgegeben von Hubert Cancik und Helmuth Schneider, Verlag J. B. Metzler, 2000, SS.1118ff.; 松原國師『西洋古典学事典』京都大学出版会, 2010年, 1043-1044頁

27 Plautus, 'The Two Menaechmuses', *op.cit.*, pp.372-373 (邦訳, 346頁). 原文は以下の通り。

quem tu adservare recte, ne aufugiat, voles, esca atque potione vinciri decet. apud mensam plenam homini rostrum deliges; dum tu illi quod edit et quod potet praebeas, suo arbitrato adfatim cottidie, numquam edepol fugiet, tam etsi capital fecerit, facile adservabis, dum eo vinco vincies. ita istaec nimis lenta vincla sunt escaria:

28 新渡戸稲造はある漢学者から聴いた話として, 「教育の字はよほど面白い字だ, 育の字を解剖して見ると上の云は子という字を逆にしたのだそうで, 下の月という字は肉という意味だそうである。これは小供が彼方向いているのを, 美味しい物即ち肉を喰わせてやるから, 此方へ向けとって引張込む意で, これがいわゆる育の字の講釈だそうである」(「教育の目的」『新渡戸稲造論集』鈴木範久編, 岩波文庫, 2007年, 28頁) という説を紹介している。しかし〈育〉は子宮で養われる倒立した胎児の象形であり, その異体字〈毓〉が如実に示しているように母が出産する場面と深く関わる (寺崎弘昭・周禪鴻『教育の古層』かわさき市民アカデミー出版部, 2007年。何啓賢「也説“教”“毓”二字」中国教育科学研究院『教育研究』1995年第12期, 67頁)。新渡戸の説は西洋近代学校の導入を契機とする, 学習の動機づけに汲々とするようになった〈教育〉の近代的語感に引きずられた野書燕説である。

29 Plautus, 'The Two Menaechmuses', *op.cit.*, pp.412-413 (邦訳, 383頁)

- 30 Jocelyn, H. D., 'Accius, Lucius', *The Oxford Classical Dictionary*, Oxford U.P., 2003, p.3; 松原 國師, 前掲書, 73-74頁
- 31 Accius, *op.cit.*, pp.346-347
- 32 Ibid., p.352
- 33 Idem.
- 34 Gatti, P., 'Euthyches', *Der neue Pauly: Enzyklopädie der Antike*, Band 4, herausgegeben von Hubert Cancik und Helmuth Schneider, Verlag J. B. Metzler, 1998, S.323 (この記事では4世紀の文法学者とあるが誤記であろう。); Kaster, R. A., 'Euthyches', *The Oxford Classical Dictionary*, p.577
- 35 Euthyichis, 'Ars de verbo', *Grammatici Latini*, Vol. V, ex recensione Henrici Keill, Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1961, p.469; Ibid., pp.485-486にも同様の記述あり。
- 36 Vergil, *Aeneid* VII-XII, English translation by H. R. Fairclough, Loeb Classical Library, 2000, pp.208-209 (邦訳, 『アエネーイス』岡道男・高橋宏幸訳, 京都大学出版会, 2001年, 474-475頁)
- 37 *A Latin Dictionary*, founded on Andrews' edition of Freund's Latin Dictionary revised, enlarged, and in great part rewritten by Ch. T. Lewis, Oxford U.P., 1879, p.627. ただし, educare と educere が混同された用例の位置づけは再検討されなければならない。
- 38 Seneca, *Moral Essays*, Vol. II, English translation by J. W. Basore, Loeb Classical Library, 1932, pp.36-37 (邦訳, 「マルキアに寄せる慰めの書」大西英文訳, 『セネカ哲学全集 1』岩波書店, 2005年, 259-260頁)

(本研究はJSPS 科研費24530954の助成を受けたものである。)

## A Terminology of *educare* in the Latin Grammar Books: Nonius Marcellus' *De Compendiosa Doctorina* and Euthyches' *Ars de Verbo*

Hironobu SHIROZU

### Key Words

quotation of *educare*, Latin grammar, Nonius Marcellus, Euthyches, terminology of education

### Abstract

Where does the word 'education' come from? According to *O.E.D.*, it is said to be derived from the Latin word *educatio* into English around the end of 15th century. Resulting from the advance of terminological study on the word of 'education', we could throw a familiar myth of pedagogy aside. A term of 'educate' derived from not *educere* which means to educe, but *educare* which implies to nourish mankind, animal and even plant. This study aims to assemble a great number of quotations containing *educare* in the Latin literature, and to analysis the signification in their own contexts.

In this paper, citations of *educare* in two books of Latin grammar are focused on. One is *De Compendiosa Doctorina* which was written by Nonius Marcellus in the 4th century. The other is *Ars de Verbo* by Euthyches about the 6th century. These books were historically precious sources, because scholars and disciples referred to them as a glossary of Latin in the Middle Ages. It is worth mentioning that both N. Marcellus and Euthyches insisted that *educare* should be *nutrire*: nourishing. Their arguments grounded on a variety of exemplary citations: Varro's *Cato: or the educator*, Plautus' *Menaechmuses*, Accius' *Andromeda*, and Vergil's *Aeneid*. It is certain that Latin grammarian in the late Antiquity could explicitly distinguish *educare* from other similar verb *educere*.